

2022年3月25日

## 「ウクライナと大阪冬の陣」

中曽根平和研究所理事長  
藤崎一郎

いまロシアのウクライナ侵略開始 1 カ月たって片や毎日ロシアの砲撃が行われ片や随時和平協議が行われている。

ロシアがなぜ暴挙に出たか。プーチン個人に帰すよりもソ連時代からの力は使えるときは使うもの、近隣の目下は屈服させるものという DNA によるものと見ればわかりやすい。これはこうした全体主義国家に共通なものだろう。

テレビや新聞を見ているとウクライナの抵抗が予想以上で、ロシアがてこずっている、補給面でもロシア側に問題が出始めていると報道や解説が多い。ゼレンスキー大統領が主要国議会でつぎつぎ演説し、ロシアが世界的にますます孤立していることも伝えられる。早期に席捲できると考えていたプーチンの当初の思惑が外れたことは事実だろう。ロシア国内での反戦運動も予想外に活発で心強い。「プーチンの終わりの始まり」という見方は正しいかもしれない。ロシアという国家のしかし「自分が聞きたいことを聞く」という身びいき解説になってしまっていないかを常によく考える必要がある。

本当にロシア側が行き詰っていると見ていいのか。1 か月かけて発表されている市民の死者が 1,000 人前後である。もちろん一人の命でも尊い。しかし制空権を完全に米側に握られていた 1945 年 3 月 10 日の東京大空襲の犠牲者は一晩で 10 万人の死者を出した。なぜロシアの攻撃の死者数は限定的なのか。ウクライナの反撃力が意想外に強かったからか。演習と騙して連れてきたロシア兵の士気が低いからか。それらもちろん考えられる。

しかしもう一つの要因もあると考えていいのではないか。それはプーチンがなんとかゼレンスキー自身を降伏させようと真綿で首を絞めるようにキエフを包囲してジワジワと追いつめているからではないかということである。

ゼレンスキーはいまや世界のヒーローである。彼を殺してしまったら彼は抵抗のシンボルとなる。だからキエフ中心部への砲撃は抑制的である。ゼレンスキー後、いかなる傀儡政権をもってきても統治は難しくなる。だからこそ本丸でないマリウポリ市などを標的として砲撃をしつつゼレンスキーと和平交渉を行っているのではないか。

実際発表される交渉の条件を見ているとゼレンスキーは NATO 加入はあきらめ、武装中立に降りつつある。だんだん武装の内容も制限されるかもしれない。砲撃を受けながらの和平交渉が双方に公平なものになるはずがない。第二次世界大戦末期、日本は「忍び難きを忍び」ポツダム宣言を無条件で受け入れざるをえなかったではないか。

もうひとつの意味なき現象の説明だけに近い例を述べよう。ロシアの40キロに及ぶ戦車トラックの行列の話がでてくる。これは進んでいないが、それはキエフに近い橋をウクライナ側が爆破したから進めなくなっている、という解説は殆どされない。橋の修復はいつ頃できるか、そうなると一気に侵攻が行われるかもあまり議論されない。ただ野ざらしの行列を映して補給が難しくロシアが苦戦していることだけが描写される。

主要国の対ウクライナ支援についても連日発表されている。ゼレンスキーの米議会での演説、ドイツ議会での演説は悲痛な叫びである。支援に感謝しつつも、空からの攻撃に無力でどんどん市民の命が失われていく、飛行禁止区域や航空機供与などしてほしいと訴えた。今の制裁や支援だけでは不十分だというのである。もちろん対露戦争になる可能性が大きい飛行禁止区域は無理だろう。アメリカ国民の過半は戦争に巻き込まれたいと世論調査に答えている。20年のアフガンイラク戦争で7,000人が犠牲になり、もうたくさんということだろう。ドイツなども参戦したという口実を与えないよう慎重である。ロシアにプーチンの核威嚇も奏功しているかもしれない。プーチンは西側の足元を見つつ巧妙に和戦両様の展開を行っているのだろう。

この和平交渉を見ていて思い浮かぶのは大阪冬の陣である。

大阪冬の陣は、1614年11月から豊臣方と江戸幕府の間で戦われた。浪人を集めた10万の軍勢の豊臣は大阪城に籠り、大名たち率いる20万の軍勢の徳川方がこれを取り囲んだ。徳川方から砲撃が行われ、豊臣方が譲る形で12月20日に和議が成立した。その条件はいろいろあるが、ポイントは本丸だけ残し、二の丸、三の丸を破壊し、堀を埋め立てることだった。この結果大阪城の本丸は丸裸になった。そして翌年3月には大阪の浪人の狼藉など不穏な動きがあり治安維持、民の保護が必要との理由で徳川は新たな合戦準備を始める。(居留民保護は戦前の軍部がいつも使った口実である。今回プーチンもドンバス攻撃の理由にナチスのようなゼレンスキー政権からロシア系居留民保護する必要があったという。)4月下旬から6月初めまで行われたのが大阪夏の陣である。秀頼らは丸裸の本丸に籠城したが徳川方にやすやす攻め込まれ自害して終わる。

砲撃はすぐ効く。制裁はじわじわ効く。砲撃が劇薬なら制裁は漢方薬である。短期的にどちらが効果が強いかは自明であろう。根くらべでは残念ながら先方に分がある。ロシア市民がマックのハンバーガーを食べられなくなりスタバでコーヒーを飲めなくなってもすぐには干上らない。エネルギーについても日本や米国は対露依存度が1割以下だがドイツは5割である。ノードストローム2のパイプラインはストップしたが依存率低下には時間がかかる。

率直に書く。残念だが、戦況はロシアに有利なのではないか。そしてゼレンスキーは和平条件でどんどん後退させられるのではないか。ドネスクとルハンスクという南部二州の独立は呑まされ、それ以上広い南部にもロシアの手が及ぶかもしれない。和平が整った後、大阪夏の陣が始まらないようしっかり停戦を監視して維持できるかは西側の決意にかかっている。国連もいまこそ使わねばならない。もちろんこれにロシアの同意を得るのは至難の技だが。

最後に日本との関係を書く。

第一は今こそ G7 連帯を維持すべきだ。対中、対ミャンマー、対イランでは、当方の事情もあり同じレベルの対応は簡単ではない。今回は、上に述べた事情もあり、たとえばドイツよりむしろ日本の方が制裁にしっかり対応できる。

第二にウクライナ難民支援など思い切って行うべきである。これまで日本政府が発表したのは当初 1 億ドルの借款追加 1 億ドルで計 2 億ドルである。何故侵略戦争の戦禍を受けた国から返してもらおうということになるのか。ちなみに、25 年前の湾岸戦争のとき日本は 130 億ドルの無償拠出を行っている。

第三は我が国の防衛である。わが隣国との関係で大陸の台湾侵攻が問題にされる。しかし中国がこれをやれば米国も拱手はできないことを中国はよく知っている。我々が一番懸念すべきは尖閣防衛である。無人の尖閣は空からの空挺部隊の襲撃占領にひとたまりもない。これは昨年この Quarterly 夏号 (Volume12 No.3) でも書いた。海の防衛も大事だが空の攻撃から守れるようしっかり態勢を整えるべきだろう。